

第42回(2017年度)北海道建築賞

株式会社竹中工務店北海道支店
河合 有人君

作品名 - 「六花亭札幌本店」

第42回(2017年度)北海道建築奨励賞

該当作品なし

第42回(2017年度)北海道建築賞審査員特別賞

株式会社エスエーデザインオフィス一級建築士事務所
小倉 寛征君

作品名 - 「Shimokawa Blanc」

審査経緯

本年度の北海道建築賞委員会は、1名の委員を交代した体制で行われた。第1回の委員会は応募開始間もない4月18日に開催し、ここでは表彰規程や審査日程を確認した上で、応募作品に対する全体的な審査方法について審議した。続いて、「北海道建築作品発表会作品集 2016」等の情報をもとに、今年度の審査対象になり得るような注目すべき作品について議論した。ここで挙げた作品の中から、委員会からの応募推薦対象作品として3作品を選定し、各設計者に応募についての検討を依頼することとした。

応募締切を経て開催された第2回委員会（5月22日開催）では、作品審査に関わる学会倫理規定と具体的な審査方法を確認した上で、応募推薦対象3作品を含む以下の計18作品を、今年度の審査対象とした。

応募作品および設計者（応募順）

- ①問寒別生涯学習センター（川上雅彦君、金尾和幸君/北電総合設計株式会社）
- ②掘立柱の家（米花智紀君、米花真弓君/米花建築製作所）
- ③ワッカヌプリ（鈴木謙介君、山口理都子君/有限会社鈴木謙介建築設計事務所）
- ④カムイの湯 ラビスタ阿寒川（堀内信男君、山島勝君、東口剛君、小野塚眞君/戸田建設株式会社）
- ⑤集まる家（河合宏尚君/カワイイケンチク）
- ⑥三浦電機新社屋（佐々木達郎君/株式会社佐々木達郎建築設計事務所）
- ⑦外と内のすき間 -小さな葬儀場-（笠井啓介君/笠井啓介建築研究所）
- ⑧大っきな自然・小ちやな自然（高部修君/高部建築事務所）
- ⑨平取の家（佐野天彦君/サノアトリエ）
- ⑩連なる三角の家（高木由美子君/Takagi atelier）
- ⑪16の部屋（久野浩志君、長谷川大輔君/久野浩志建築設計事務所、長谷川大輔構造計画）
- ⑫弟の家（久野浩志君、長谷川大輔君/久野浩志建築設計事務所、長谷川大輔構造計画）
- ⑬六花亭札幌本店（西田達生君、河合有人君/株式会社竹中工務店北海道支店設計部）
- ⑭北海道庁本庁舎耐震改修（本井和彦君、有竹剛君、宮本一英君/株式会社竹中工務店北海道支店設計部、株式会社竹中工務店東京本店設計部）
- ⑮アシリ・和來（寛雄平君、甘粕陽介君、岡川哲士君/株式会社NTTファシリティーズ）

⑩神社山の隠れ鳥居の家（日野桂子君/ヒノデザインアソシエイツ）

⑪北海道カントリークラブ クラブハウス（鈴木正史君、小坂仁郎君、小熊宏君/株式会社大林組札幌支店）

⑫Shimokawa Blanc（小倉寛征君/株式会社エスエーデザインオフィス一級建築士事務所）

これらの応募作品に対し、今年度の北海道建築賞においても継続して「先進性」「規範性」「洗練度」の3項目を基本的な評価軸とすることを確認した上で、第一次審査として応募書類による現地審査対象の選考を行った。各応募書類を詳しく通覧し、各委員が個別評価を述べた後に、各作品について活発な議論が為された。その結果、現地審査対象作品として、②「掘立柱の家」、⑨「平取の家」、⑪「16の部屋」、⑫「弟の家」、⑬「六花亭札幌本店」、⑮「アシリ・和來」、⑯「Shimokawa Blanc」の7作品を選定した。

現地審査は、7名の委員全員出席のもと、7月8日に②⑨⑮、7月9日に⑪⑫⑬、7月29日に⑯の日程で行った。現地においては、設計者本人からの説明に加えて、質疑を通じてそれぞれの建築の詳細を把握することができた。さらに、周辺環境との関係性から各部ディテールに至るまでを見ることで、作者の思考の深さや密度、あるいは実体としての空間の質感や完成度を確認することができた。

第3回の委員会（8月21日開催）では、現地審査を行った7作品を対象として、最終選考を行った。選考方法を再度確認した上で、まず各委員が7作品それぞれについての評価を述べるとともに、次の段階の議論へと進めたい作品を挙げた。この時点で高い評価を得られなかった⑮「アシリ・和來」については、賞の対象から外すこととした。続いて残りの6作品については、個別に多くの観点から検討がなされ、賞の決定に至るまでの議論は長時間に及んだ。最終的に北海道建築賞に⑬「六花亭札幌本店」、北海道建築賞審査員特別賞に⑯「Shimokawa Blanc」とすることを、委員全員の同意のもとで決定した。審査員特別賞は、ある特定の観点から特に高く評価されるものに対して賞を与えるものであるが、今回は2007年度以来の受賞となった。

「六花亭札幌本店」は、全体計画から細部に至るまで、入念な検討と的確な判断を積み重ねたことが伺える質の高い商業複合建築である。音楽ホールを核とした商業建築ではあるが、都市においていかに公共的空間を創出するかという意識が、南側外部の庭園のみならず内部においても感じ取ることができる。このような都市型商業建築において、合理的な機能性と表層的な操作を超えた建築的提案をして行くことは一般的に困難なことであるが、クライアントからの水準の高いあらゆる要求にひとつひとつ誠実に応えつつ、都市型商業ビルのひとつのあり方を提案し得ている力量は見事である。以上のこ

とから、本賞に値する総合的に優れた成果であると認め設計における統括責任者を北海道建築賞とするものである。

「Shimokawa Blanc」は、地域の工務店と札幌の建築家とが協働することで、下川町というひとつの小さな町の豊富な森林資源を生かしつつ、質の高い循環型住宅を創出して行こうとするプロジェクトの第一号作品である。複数の工務店と建築家が関わることや施主側の選択性など、このプロジェクトには共通するルールのみならず自由をも担保する興味深い仕組みが見られるが、作者はこの仕組みづくりから深く関わってきた。町外れの防風林に静かに向かい合うように建つ本作品の全体は、ある意味でオーソドックスな手法によって構成されているが、全面的に地元の木材を使用しながら、温熱環境的にも高い性能を確保するなど、作者のこれまでの蓄積をさりげなく敷衍することで、ある水準を超える快適な住宅が確かに創り出されている。本作品は、地域に寄り添いながら何が可能かを問うプロジェクトの活動とのつながりの観点において特に高い意義があるものと認め、北海道建築賞審査員特別賞とするものである。

現地審査を経て、残念ながら選外となった 5 作品についても以下の通り総評を簡潔に記す。

「掘立柱の家」は、この地に入植した先代が原生林を開拓したという記憶から、太い樹木によって住宅全体が支えられているというイメージを目指した意欲的な作品である。しかし、その巨大な丸太の第1次構造と、2階主室廻りの縦長のリジッドな空間、そして2階主室の廻りにまとわりつくような最上階の曖昧な空間の、各々の関係性や意図が論理的に整理されていないように思われる。このような強い要素としての丸太を使う以上、単なるイメージを超えて構造的な論理を空間構築の論理として翻訳していくことも必要であろう。

「平取の家」は、アイヌのチセをイメージの範としながら、北海道におけるモデル的住宅を提案する試みである。木造躯体を調湿に参加させるなど、環境工学的な工夫もしながら、原型に遡って思考しようとする姿勢には好感が持てる。一方で、全体的に抑えられたスケールも要因のひとつであろうが、空間の造形に物足りなさを感じるのと、土中に入る基礎廻りの処理などに疑問が残った。

「16 の部屋」は、四畳半の空間単位を縦列にかつ4層に積層させた店舗付き住宅である。同一単位の反復という単純形式でありながら、開口部の変化や吹抜あるいは外部を挟み込むことによって、様々な空間が交互に立ち現れることになる。創作における一種のゲームに、解釈する側も面白みを体験することができるであろうし、小さな空間単位ならではの現実的な心地良さもここにはあるように思われる。

「弟の家」は、大きなワンボックスの空間に、3枚の大きくU字型にくり抜かれた壁

面を基本的に挿入しただけのシンプルな住宅である。大らかに曲線によって分節されただけの空間は、上部と下部とで緩やかなグラデーションをつくりつつ、大小の開口部を通して四方の高低差の異なる外部からの様々な光と自然を魅力的に感じ取ることができ、新たなワンルームのあり方をポエティックに提案している。

「16の部屋」と「弟の家」は、いずれも高い評価がされた一方で、フォトジェニックな表現に偏りがちなことなどいくつかの指摘もなされた。優れた佳品であることは認められた上で、最高賞に位置付けるには難しいという判断に至った。作者は奨励賞受賞経験者であるだけに、その受賞作品を超える今後のさらなる展開が期待される。

「アシリ・和來」は、重度身体障害者を対象とした大規模な福祉居住施設のエントランス的な役割として計画された、ギャラリー併設のレストランである。障害者の身体表現の場であるとともに、地域と共生する場であることが想定されている。湾曲した屋根架構と開口部のフレームが特に印象的であるが、敷地全体計画における位置付け方や、各部デザインの関連性などが、全体として検討の余地があるように思われた。

(文責：山田深)

六花亭札幌本店ビル

都市空間や都市生活の質の向上に対して、既存の「商業複合施設」という枠を超えることで答えを出した作品である。

北海道を代表する菓子メーカーの札幌本店として、菓子店店舗に加えて、楽器店、和・洋のレストランなどの商業系機能が入ると同時に、音楽ホール、ギャラリーなど公共性を持つ機能構成を取っている。異なるニーズを持つ商業テナントの集合によって発生してしまう不連続を払拭し、それぞれの店舗が持つ異なるニーズは尊重するが、その中でホール、ホワイエ、庭園などのパブリックな機能と上階からの都市景観への眺望を持つ空間を挿入することによって、建築全体を単なる商業施設から都市の中におけるパブリックスペースを持った先進的な都市建築に見事に変換させている。

また、敷地の使い方とそれに連動した建築フォルムのデザインにも大きな特徴がある。設計者は、施主の要望もさることながら、一般には裏通りの陰気で無機質な中通りを形成している札幌都心部の都市空間に一矢を報いるが如く、北海道自生種の樹木や花卉、草本による庭園を敷地の約半分近くを使って面させ、快適な空間を中通り側に出現させたのである。さらに、都心の一等地に建てる建築として必要かつ最大限の床面積を確保する必要上、公開空地などで高さ制限の緩和や容積緩和などを受けることが通例であるのに対し、この大きな庭園を取ってしまったことからできなくなった公開空地による緩和を天空率緩和によって実現し、庭園を実現しつつも前面道路側からのすっきりとしたまっすぐなボリュームを確保し、端正で洗練されたファサードデザインを創り出し、上質な街路沿道景観の形成に貢献している。

この作品のもう一つの特徴は、世界中の至る所の都市に必然的に出現してしまう床が積層されたビルディングのスタイルに対し、同様に10層もの床を重ねる構成でありながら、建築を構成する素材やそれが織りなす空間構成のハーモニーが訪れる者に心地よさを体感させることである。自生種を主体とした庭園だけでなく、エントランス壁には、大判の米松の木目を浮き出させた浮造り、5階のギャラリーには、2008年の洞爺湖サミット時にメディアセンターで使われた北海道産カラマツ間伐材をリユースした仕切り壁、さらに6階ホワイエには、フレスコ画技法を使った壁画などが、周囲の仕上げとの関係を注意深く調整しながら楚々と配されることで、近代資本主義のアイコンのようなビルディングには、切り捨てられて到底存在しなくなってしまった建築と人との親密な親近感を感じさせる仕掛けが巧みに配されたデザインになっているのである。

設計期間は約1年程度だったようだが、その前に約4年をかけて計画を行い、上記のような建築プログラムと実現手法の検討を行なったようである。その間、現実の壁にぶつかりながらも様々な可能性が追求され、このような作品に結びついた。プライベートな商業建築は、もちろん施主の所有物でもあるが、都市の財産にもたりうる質と内容を獲得しようと努力した設計者の姿勢は、これからの北海道の都市建築の質向上を考える場合、重要で規範的な位置付けであると言える。

ここに北海道建築賞を贈り高く評価したい。

(文責：小篠隆生)

「Shimokawa Blanc」

「Shimokawa Blanc」は、道北の町・下川町の市街地の一面に位置するコートハウスである。敷地前面には、過去に廃線した鉄道に沿って残る数少ない鉄道防風林を歴史的記憶の風景として利用し、それを建屋内からの風景となる様に中庭をコの字型に取り囲んで配置している。室内空間構成は、玄関より水廻りなどのユーティリティを背にし、中庭を見せながらストレートに通路からリビングへと繋がっている。リビングから中庭への見せ方は北側へ大きな開口部を設け、北側採光とし、安定した明るさを室内に与えている。リビングから更に和室、寝室と連なり、中庭から閉じながら奥へと繋がっている。中庭に対する開口部の開き方の大小と、各々のその場所における天井高さに高低差を設けることで、視線の広がりやコントロールし、空間に秩序を与えている。この手法はプライベートな空間づくりにおいてオーソドックスな手法ではあるが、その手法をストレートに使いながら正統的な住宅としての空間を作り出している。夏冬の寒暖差が60℃にもなる地域にシーズンを通して安定した光と中庭の刻々と変化する風景を取り入れた、良質な内部空間を作り上げた。また、細部に渡る室内のディテールは、丁寧なつくりをしており工務店の技術者の力量を高次元に設計者が引き出した結果が伺える。

特に注目した点は、この建築を作品としてのみ捉えるのではなく、住宅建築を地域社会に供給する仕組みを設計者自ら他者と協同し成立させている点である。「森とイエ」プロジェクトは、下川町、その近郊のみの限られた地域にしか成立しないシステムではなく、地域材を利用した良質な家作りの供給システムとして道内各地、ましてや、仕様・性能やプログラム、デザインコードの変更により、どの地域にも転用可能なものとなっており、そのような意味で「規範性」を持っていると言える。「Shimokawa Blanc」は、そのプロジェクトの第一号の作品である。また、このシステムとも言うべきプロジェクトは、単なるお見合い的な建築家の選定ではなく、オーナー主導、工務店主導、標準モデルを選択できるユーザーサイドに立った選択方法を取り入れ、オーナーの知識・意識向上のための勉強会、交流会を開催するなど、家をつくるストーリーをユーザーに合わせて協同していく取組みも評価に値する。建築家や工務店に対する関係を消費者的オーナーとして経済的にのみ考えるのではなく、各々を地域社会の中で有意義に結びつけ、商業ベースに則っているハウスメーカーと対峙した新たな地域の住宅設計・製作供給のシステムと成り得る可能性を持っている。道内の木造住宅は、道、各研究機関、大学、メーカー、工務店、ユーザー等の研究、協力、努力により、この30年間で技術的、性能的に、ほぼ成熟した域に達した。その域に達している状況から、更なる質の高い住空間、北海道以外には成し得ない次世代の寒冷地住空間づくりへの可能性を期待させる作品である。

この建築の良質な空間と地域における住宅供給のシステムづくりのプロジェクトを両立させた点は、質の高い住宅をその地域につくるという点において意義があり、北海道建築賞審査員特別賞として高く評価したい。

(文責：海藤裕司)